

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：13601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2016

課題番号：15K12810

研究課題名（和文）方法としての比較思想 知覚論の東西比較をモデルとして

研究課題名（英文）Comparative Philosophy of Perception

研究代表者

護山 真也（MORIYAMA, Shinya）

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：60467199

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：知覚をテーマとして、インド哲学・仏教学と心の哲学・認知科学などの現代の哲学的研究との学際的な比較思想研究のプラットフォームを構築することが、本研究の目的である。この目的を達成するために、国内外の研究者を招へいしての国際ワークショップ、ならびに若手研究者を中心としたワークショップを各1回ずつ開催して、それぞれの専門領域の枠を超えた、開かれた議論の場を作り、相互の交流を促進した。その成果として、知覚の概念主義をめぐる現代哲学の諸議論と、インド哲学で問題とされた有分別知覚・無分別知覚と知覚の真偽に関する議論との関連性や、知覚経験における主体および主観性の問題などに新知見を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to establish a platform for a comparative philosophy of perception in a transdisciplinary manner, among scholars of Indian Philosophy, Buddhist Philosophy, Cognitive Science, Philosophy of Mind, and Analytical Philosophy. In order to fulfill the purpose, we have organized two workshops on comparative philosophy of perception. As the results, we came to find in following points the target for future study of this topic. First, the contemporary discussion on conceptualism/non-conceptualism of perception provides a clue for another look of classical debate of Indian philosophy concerning the status of conceptual though (vikalpa) in our perceptual experience. Second, the Buddhist argument on self-awareness (svasamvedana), the core of every perceptual experience, can be analyzed as showing a momentary, minimum subjectivity, which is compatible with the Buddhist doctrine of sleflessness.

研究分野：インド仏教認識論

キーワード：知覚の哲学 自己認識 主観性 エナクティブ主義 場所の論理 概念主義 錯誤知 比較思想

1. 研究開始当初の背景

本邦における従来の比較思想研究の主流は、中村元(1912-1999)をはじめとする、知の巨人たちの該博な知識と関心に依存する形で進められてきた。たとえば、中村の遺作となった『論理の構造』(青土社、2000)で、中村は、論理思想の比較研究という大きな課題に対して、東西の論理思想を「比較しただけでただ並べるのであるならば、それは知的好奇心を満足させるだけで、新しいものを創造する力に欠ける恐れがある」と警鐘を鳴らし、「異質的なものの対立の基底にまで掘りこんで思惟方法における相違の起こる所以を解明し、構造的に理解する必要がある」と論じている。だが、中村ほどの才能をもってしても、異なる分野の思想内容の理解が困難を極めたことは想像にかたくない。まして、中村の時代よりもさらに専門化と細分化が進んでいる今日、一人の力で比較思想の課題を達成することはおよそ不可能と言わざるを得ない。

一方、目を海外に転じてみれば、近年、北米やオーストラリアなどで活躍するインド哲学・仏教学研究者と認知科学、心の哲学、分析形而上学などの現代哲学の研究者との連携により、目覚ましい成果が次々と発表されている。それらの成果は、「主観性」や「自由意志と決定論」など、特定のテーマをめぐるシンポジウムやワークショップから生まれてきた。分析哲学の素養を身につけた仏教哲学者が、瞑想の実践を行う認知科学の専門家と対等に対話を交わし、その結果をそれぞれの分野の研究にフィードバックしてゆく。ここには、集合知としての比較思想の可能性が示されている。

ただし、このような新たな比較思想のスタイルが本邦で皆無というわけではない。その一例として、連携研究者(吉水千鶴子)が2014年3月に開催したワークショップ「仏教認識論と比較思想の可能性」(筑波大学)を挙げることができる。そのワークショップに参加した研究代表者(護山真也)と研究分担者(三谷尚澄)は、そこで、仏教認識論と心の哲学という二つの視点から、所与(Given)をめぐる哲学的問題について共同討議を行った。そして、そのときの経験が機縁となり、知覚に関する学際的な比較思想研究の試みがはじまったのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、知覚をテーマとして、インド哲学・仏教学・心の哲学・認知科学の領域を超えて学術交流を促すための、知のネットワークを構築することにある。

この目的を実現するためには、これまで文献実証的な方法を主流として研究されてきたインド哲学・仏教学の方法を見直し、専門の研究者のみに通じる特殊な術語の使用を控え、開かれた議論空間を作りあげなければならない。そのために、本研究は、複数回の

ワークショップを企画して、研究者相互の継続的な交流を促進し、相互に他領域の研究と接続しやすい環境を作ることを目指した。

その具体的なテーマとして、(1)現代の知覚の哲学において論じられる知覚の概念主義(conceptualism)をめぐる諸議論と関連させながら、インド哲学・仏教哲学における有分別知覚(savikalpapratyakṣa)・無分別知覚(nirvikalpapratyakṣa)をめぐる議論を整理し、二つの伝統の対話を試みること、(2)知覚経験には、その経験がその主体からのみアクセスできるという現象的性格がそなわるとされるが、そのことは仏教認識論で言われる自己認識(svasamvedana)ある瞬間の認識は、その認識それ自身により自覚されるの考えとどのように結びつくのか、という二つが設定された。

また、比較思想研究の現状を把握し、本研究の試みを国内外に発信するために、比較思想学会や海外でのワークショップに参加、あるいは、北米の大学に趣き、現地の研究状況を把握することも、目標の一つとされた。

3. 研究の方法

研究代表者と研究分担者が定期的に会合をもちながら、ワークショップの課題を設定し、関連する国内外の研究者と連絡をとりながら、ワークショップを実施・運営し、その成果をまとめることが、本研究の方法となる。

具体的には、2015(平成27)年度に、Comparative Philosophy of Perceptionと題する国際ワークショップを企画し、国内外より13名の研究者を招へいして、知覚の哲学に関するインド哲学・仏教学・現代の心の哲学・分析形而上学からのアプローチをめぐる発表と討議を行った。

また、2016(平成28)年度には、国内の研究者を中心として、特に自己認識と主観性をめぐる知覚の哲学の問題について発表と討議を行い、本研究の総括とした。

これに加えて、比較思想学会をはじめとする国内外の比較思想関連の学会・ワークショップに出席することで、本研究の試みを海外の研究者に伝え、相互の連携のための架け橋としたことも、付言しておきたい。

4. 研究成果

(1) 国際ワークショップ “Comparative Philosophy of Perception”の開催

まず、2015年11月14,15の二日間に開催された国際ワークショップ Comparative Philosophy of Perception では、次のようなプログラムが組まれた。

<第1日>

Eli Franco (Leipzig University), “Another way of doing comparative philosophy”

Karin Preisendanz (University of Vienna), “Impediments to Perception in the Early History of Indian Philosophy”

Kei Kataoka (Kyushu University), “A Brief Sketch of Indian Theories of Error (vibhrama)”
Phyllis Granoff (Yale University), “The Language of Perception: Śrīharṣa’s Khaṇḍanakhaṇḍakhādyā”
Yoichi Iwasaki (Tokyo University), “Are Logicians Enjoying Music? Nyāya’s Structured World and Destructuring Cognition”

<第2日>

Koji Tanaka (Australian National University), “A Role of Perception in Inference: A Study of Candrakīrti and Dharmakīrti”
Patrick McAllister (University of Heidelberg), “Prajñākaragupta on perception and inference”
Shinya Moriyama (Shinshu University), “To what extent is perception non-conceptual? An analysis of pseudo-perception (pratyakṣābhāsa) in the Buddhist epistemology”
Naozumi Mitani (Shinshu University), “On the Philosophical Grammar of Perception: A Sellarsian approach”
Naoya Fujikawa (Tokyo Metropolitan University), “Hallucination as Seeing Nonexistent Objects”
Seishu Nishimura (Shiga University), “Temporal Discontinuity of Perceptual Experience”
Shoryu Katsura, “Concluding Remarks”

本ワークショップでは、Eli Franco, Karin Preisendaz, Koji Tanaka をはじめとする、海外の第一線で活躍する研究者を招へいし、最新の比較思想研究、インド哲学・仏教学研究の成果に基づき発表と討議を重ねた。ここでは、英語を公用の言語とすることにより、それぞれの分野の難解な日本語訳に悩まされることなく、その思想内容や議論そのものの分析と比較に進むことができた。具体的には、次のような点で、領域を超えた思想研究の交流の意義が確認された。

Kataoka, Moriyama, Iwasaki 等の発表に顕著であるが、今回、西洋哲学の研究者との対話を念頭におくことで、従来であれば、インド土着の思想史的な文脈でのみ語られてきた、知覚の概念性・非概念性をめぐる議論、あるいは誤謬知・錯覚をめぐる議論について、その哲学的意義について踏み込んだ考察が展開された。たとえば、ダルマキールティは有形象認識論の立場から、知覚経験は本質的に心的表象を伴うものであると認めているが、その表象は外部対象を正しく表象したものではないことがあると述べる。その多くは、陽炎を「水」と認識する場合のように、「～として」という形で、本来の知覚対象とは異なるものを概念的に措定するところに錯誤の原因が求められる。しかしながら、ティミラ眼病者に映じる髪の毛の場合には、「～として」という概念的な措定なしに、明晰に顕現する、非概念的な知覚像そのものに錯誤性があるとされる。この点で、ダルマキールテ

イの知覚論は、知覚に「～として(見る/見える)」の構造を読み取る知覚論との比較を必要とすることが分かる。その点で、Mitani が提示する「見える」などの知覚に関連する動詞表現の分析、あるいは、Fujikawa が考察した非存在対象の幻覚に関する分析などから、さらなる考察への手がかりが得られたことは、一つの成果である。

(2) ワークショップ「知覚の比較哲学」の開催

次に、2017年3月4日に行われたワークショップ「知覚の比較哲学」は、次のプログラムで実施された。

護山真也(信州大学)「自己認識 (svasaṃvedana) と主観性—Evan Thompson “Self-No-Self? Memory and Reflexive Awareness”の批判的検討—」
片岡啓(九州大学)「自己認識の生成・背景・変質」
三代舞(早稲田大学)「ダルマキールティの自己認識論」
小川祐輔(筑波大学)「デイヴィッドソニアンからみた分析哲学における自己知論の展開—こころのなかの対象との面識による自己知論からの脱却過程として—」
呉羽真(京都大学)「デューイの経験の理論の可能性—生の哲学としてのプラグマティズム—」
三谷尚澄(信州大学)「知覚と言語—西田における場所の論理と日本語文法の交差点—」

このワークショップでは、仏教認識論が論じる自己認識 (svasaṃvedana) の考えを契機としながら、比較哲学の実践を試みたものである。ダルマキールティが言う自己認識は、あらゆる知覚経験に内在する、根元的な自覚の構造をもつものであり、自己の心の働きを深く見つめる仏教の実践のなかから確立された理論である。片岡は、ダルマキールティに至る自己認識論の展開には、「(対象を)手に取る」というメタファーから、「(心自体が)輝き出す」というメタファーへの転換があったことを論じた。また、三代は、自己認識の生成のためには、それ以前における心の習慣化が必要であることを、abhyāsa という概念に注目しながら、指摘した。一方、これらの見解を受けて、小川は、心的状態に対する外部主義の立場をとるときに、知覚経験の一人称的な権威がどのようにして確保されるのか、デイヴィッドソンに端を発する議論を紹介・分析した。この点は、認識の妥当性は、認識それ自体から保証されるとする、インド哲学の学派と、それは当該の認識とは別のものから保証されるとする別の学派との対立を喚起する。質疑応答の場面では、インド哲学における自律的真理論と他律的真理論に関する議論が参加者の石村克より提示された。三代が論じた自己認識と認識の習慣性と

いう点と関連する視点として、呉羽からデュエイの経験概念についての報告がなされた。デュエイの言う経験は、意識経験でも、認知プロセスでもなく、「生」を構成するエピソードとして捉えられる。デュエイは、「経験」をこう捉えることで、二元論の立場を超えて、感覚と運動から成る能動的な働きを示そうとしている。このあたりのデュエイの考え方は、認識を心身の相即から成る、連続体のなかで捉える仏教のエナクティブ主義的傾向と関連する。また、自己認識は究極的には、主客の二元を超えたものとして記述されるが、この点と関連して、三谷は、主客の対立とその乗り越えの問題を、主語と述語という言葉形式とその乗り越えの問題として論じる視点を提示することを通じて、西田における場所の論理と、C. D. Broad, Wilfrid Sellars による Absolute Process の形而上学を連続的に考察する、という新しい比較哲学的トピックの可能性を指摘した。

インド哲学・仏教学の研究と現代の心の哲学、言語哲学、プラグマティズムとの間にある溝を超えて、相互の問題意識を共有するための対話の場を構築するためには、相互の問題意識を整理し、議論すべきポイントを絞り込む作業が不可欠である。時間の都合もあり、その点の作業が事前に行き届かなかった点は、反省されるべき点である。

(3) 仏教認識論における実体視 (adhyavasāya) とカント哲学における構想力 (Einbildungskraft) との比較研究

「知覚とは概念的思惟 (kalpanā) を離れたものである」が、ディグナーガが知覚に対して与えた定義である。彼の後継者であるダルマキールティは、知覚と行為との関係を念頭に置きながら、そのような無分別の知覚に後続する 実体視 (adhyavasāya) という心の働きに注目して、その働きを通して、行為の目的ともなる知覚対象、つまり、心に映じるイメージとしてではなく、現にそこに在るものとしての対象が 構成 されることを論じている。この adhyavasāya という概念はカント哲学が言う構想力 (Einbildungskraft) と親和性をもつ。この点は、仏教認識論研究のパイオニアであるロシアの碩学 Th. シチェルバツコイは、大著『仏教論理学』(*Buddhist Logic*)において示唆していたのだが、その後、長らく等閑視されてきた。今回、P. ストロウソンの論考 “Imagination and Perception” などを手掛かりにして、あらためて、両概念の比較を試みた。その結果、ストロウソンが言う

種あるいは概念としての同定作用 (kind-identification/concept-identification) と個あるいは対象としての同定作用 (individual-identification/object-identification) という両者は、まさにダルマキールティが知覚の場面で、瞬間的な個物がある種の連続体として同定し、また、推理の場面で、概念的な対象を個物として同定する作用として

adhyavasāya を捉えていることとも比較可能であることが確認できる。さらに、注釈者ダルモッタラやプラジュニャーカラグプタの解釈も考慮することで、adhyavasāya の働きが、人間の行為や日常的振る舞いが問題になる文脈で要請されること、その際には、主観的な知覚イメージを、複数の人間の間で共有できる公的な対象へと転化させる働きが、adhyavasāya に認められる。この点も、産出的構想力の働きと相通じるものである。

(4) 仏教認識論とエナクティブ主義との比較研究

仏教認識論における知覚論を扱うなかで、その議論の一部は、エナクティブ主義として知られる F. ヴァレラ、E. トンプソン、E. ロッシュの『身体化された心』(*The Embodied Mind*) が取り上げた議論、また、その影響を受けた A. ノエの『知覚のなかの行為』(*Action in Perception*) の議論と親和性があることが分かってきた。特に、[1] 心は身体と相即した存在であり、それぞれの諸要素の縁起的連関、特に、色心互薫説と呼ばれる心身間の協働作用との関連で捉えられるとする点、および、[2] 知覚経験は、所与の外界からの刺激を単に受容するという形ではなく、感覚・運動技能の反復・習慣化を通して意味づけられた世界と関連するという形で理解されるという点で、二つの思想は共通していることが明らかとなった。ただし、身体 の捉え方について、それぞれの思想は多層的な理解を示しているため、今後、より詳細な比較を必要とするという課題が残された。

この成果は、2016年6月19日に開催された比較思想学会第43回大会において口頭発表され、2017年に論文として公表された。

(5) 神の全知とブッダの全知に関するプラジュニャーカラグプタの議論についての考察

仏教の知覚論には、ヨーガ行者の直観として知られる修行者に特有の知覚経験の分析が含まれる。その修行者の理想とされるのがブッダであり、そのブッダは、推論的な認識を重ねながら、最終的に、過去・現在・未来のすべての生き物の運命と事物とを見通すことができる。このブッダの全知 (sarvajñatva, omniscience) について、8世紀に活躍したプラジュニャーカラグプタは、ニヤヤ・ヴァイシェーシカ学派の対論者が説く常住なる主宰神 (Īśvara) の全知と対比させながら、その特徴を明確にしている。すなわち、主宰神の全知は、鏡のように不動のものでありながら、そこに様々なものが映り込むような受動的な構造で語られるのに対して、ブッダの全知は、対象を能動的に把握する通常の知覚の延長にあるものとされる。ブッダは、推論的な認識からはじまる、瞑想の実践を重ねることで、ある瞬間に、すべてを把握することが可能となる。では、それぞれの全知により、過去や未来の対象はいかにして知

覚されるのか。この問いに対して、實在論者であるニヤーヤ・ヴァイシェシカ学派は困難を抱える。なぜなら、主宰神は永遠の存在、無時間的な存在であるために、過去・現在・未来という時制をもつ存在者と直接的に関わることができないからである。一方、ブッダの全知の場合には、それは無時間的なものではなく、あくまでもブッダ自身の視点、ブッダにとっての現在という時点から、すべてが捉えられる。その際、ブッダは、「他者に依拠しながら」、つまり、第三者の視点を自らに取り込むことで、現在でしかない時間のなかに、他者視点からの「過去」や「未来」を取り込むことで、三世を見通す知覚を可能にしている、とされる。この分析は、知覚経験には必然的に 実体視 (adhyavasāya) と呼ばれる、ある種の構想力の介在が不可欠であるとする、仏教認識論の考えから出てきたものとして理解される。

なお、この内容は、ハワイ大学で行われた国際ワークショップ “God/No-God, Omniscience and Realism/Anti-Realism” で発表された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

護山真也, 「仏教認識論とエナクティブ・アプローチ」, 『比較思想研究』第43号, pp. 134-141, 2017. 査読有.

Moriyama, Shinya, “Review of Sara L. McClintock, Omniscience and the Rhetoric of Reason”, *Journal of Buddhist Philosophy* 2, pp. 291-296, 2016. 査読無.

Moriyama, Shinya, “Adhyavasāya and Imagination”, *Shinshu Studies in Humanities* 3, pp. 1-14, 2016. 査読有.

[学会発表](計7件)

Moriyama, Shinya, “Prajñākaragupta on Omniscience, Time, and Existence”, *Templeton International Workshop: God/No-God, Omniscience and Realism/Anti-Realism*. 2017.3.12. University of Hawaii (Honolulu, USA).

護山真也, 「自己認識と主観性 E. Thompson "Self-No-Self? Memory and Reflexive Awareness"の批判的検討」, ワークショップ「知覚の比較哲学」, 2017.3.4. 信州大学(長野).

三谷尚澄, 「知覚と言語 西田における場所の論理と日本語文法の交差点」, ワークショップ「知覚の比較哲学」, 2017.3.4. 信州大学(長野).

護山真也, 「仏教認識論とエナクティブ・アプローチ」, 比較思想学会第43回大会, 2016.6.19. 関西大学(大阪).

Naozumi Mitani, “On the Depth Grammar

of Being a Person: What happens when Sellarsian philosophers meet Fusion Philosophy?”, Thursday Seminar, 2016.5.12. Australian National University (Canberra, Australia)

Moriyama, Shinya, “A Comparative Philosophical Approach to Dharmakīrti’s Analysis of Perceptual Error”, *International Workshop: Comparative Philosophy of Perception*. 2015.11.15. Shinshu University (Nagano).

Mitani, Naozumi, “On the philosophical grammar of perception: A Sellarsian approach”, *International Workshop: Comparative Philosophy of Perception*. 2015.11.15. Shinshu University (Nagano).

Moriyama, Shinya, “Prajñākaragupta’s sattopalambhavāda: An inquiry into an Indian version of ‘esse is percipi’”, 16th World Sanskrit Conference. 2015.6.30. Renaissance Hotel Bangkok (Bangkok, Thailand)

[その他]

ワークショップ・ブログ記事:

http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/moriyama_1/2015/11/100833.php

http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/moriyama_1/2015/11/100834.php

http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/moriyama_1/2017/03/104299.php

6. 研究組織

(1) 研究代表者

護山 真也 (MORIYAMA, Shinya)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授
研究者番号: 60467199

(2) 研究分担者

三谷 尚澄 (MITANI, Naozumi)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授
研究者番号: 60549377

(3) 連携研究者

吉水 千鶴子 (YOSHIMIZU, Chizuko)

筑波大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号: 10361297

今井 章 (IMAI, Akira)

信州大学・学術研究院人文科学系・教授
研究者番号: 80211754